

續紅雪録

泉鏡花作

—

「淫婦、淫婦といふが、赤帽君、君は彼の別荘の美人を淫婦といふか。」旅客は激しく畳みかけるやうに言ひ返した。

「え、能く彼の體が、白い膏になつて溶解けない事だと思ふくらゐなもんなんで、」と横に蒲鉾を喰ひ切つた。

「大層委しいと見える、ありや一體何ういふ身分だ。」

「へい、御存じではございませんか、ありや貴客有名な、といふ、大したお役人様の夫人でございます。」

「否、そりや聞いた、千之助に聞いたから心得て居るが、其の生立だよ、其の以前の事だよ。」

「まあ、旦那、千之助様を先づ、別荘へ連込みました、あとをお聞かせ下さいまし、承りかけたで、氣になつてなりません。又お話の様子に因りましては、申上げます心得がございますで。」と半ば残したのを口へ入れて、拇指をぺろりと舐める。

旅客は次第に酔が出た、何の仔細もない事を、然も感に堪へた趣して、

「あゝ、成程、私も人事だが、癩に障つて、腹に納めちや居られんのだ。こんな事を胸に持つて、ぐづ／＼して乗つた日にや、雪の上へ、猶汽車が重からう。最う／＼東京へ歸るまでに、すつかり胸のすくやうにさらけ出して下さい。其處で千之字だ。

其の媚いたのに連れられて、枝折戸を入つたわ。風俗のしどけない、裾がぞろりと敷きさうなのと並んだ處は、お庭内を道行といふ姿だけれども、前鼻緒の切れた下駄と、鞆とを両手に提げて、跛を引いて悄乎は、餘り圖の好い形ぢやない。意氣地なしの千の字め、何の事はない、小学校の色男が、腕白に苛められて、泣ツ面で居る處を、綺麗な餘所の小母さんに助けられた有様です。

これから何處ともなく、室の花がほんのりと薫つて来るやうな、婦人と肩を、いや婦人に肩を摺寄せられて、些と固くなつたといふ體で、あひかはらず跛でね。薄雪のかゝつた一面の芝の上を、取着の其の小高い西洋室へ行くんだが、芝生は眞圓な小さな山の形に出来て居て、段はないが爪尖上。右の方は此の築山の裾を、小川が一條繞つて居たが、水が切れて美しい小石ばかり。窓の梅の北面は雪封じて寒しさに、龜裂が入つたやうに底に凍が張つて居た。通る間、外の樹はない、梅がばら／＼五六本、枝ぶりに紅梅だらうと思ふのもあつたが、皆 蕾が堅かつた。

左の方は、遠く奥の方に、黒板塀が松の植込の中に見えて、此處は、飛石、石燈籠、盆栽もならべてある、折曲りの縁も見える、次第に歩行くにつれて高くなる、目の下に、藁葺の小屋が故ツと一ツ、茶座敷と見えて、廂には落葉の赤らんだのが其まゝ、庭も仕切つてお定りの敷松葉。横手の、今の縁側に、ずつと障子が並んで、端の一枚が開いて居た、早や樹の蔭は薄暗いから、其處にでも人が居れば居るだ

らうかと思ふやうなものゝ、寂莫して、なるほど、
(誰も居りません、)といったのが眞個らしい。

何でも、此の西洋室は、一室だけ、好事で、別荘
の二階に拵へたので、直ぐ扉を開けると、築山へ出
て、芝生を下りるやうになつて居るのだつた。

入口の扉の傍に、前津から廣見へかけて、田
圃を見晴しの處に、何處の公園にもある、口八臺の
やうな腰掛が二三脚置いてあつたから、千之助は其
の上へ靴を置いて、

(お言に甘えまして、飛んだ失禮をいたしました
が、それでは此處を少々お借り申して、)

(何ですね、貴下、まあ、此方へお入なさいま
し、)ツて、二三歩前へ駈抜けると、庭内を練つて
来た上靴のまんま、半ば引明けたなりになつて居る
扉の中へ、ひら／＼と入りながら、ばたりと其處へ
上靴を直して出して、

(さあ、何うぞ、御覽なさいな、吹込みますぢや
ありませんか、) と半身を出して硝子の戸越。

雪が又颯と一時。

2

「 2

二

「 (本宅は貴下、これでも何ですよ、賑な町の方
で、近所が騒々しいんですよ。其にね、主だつた人
は暮ほどもから、上向きの用をかねまして、東京へ参
つて居て、留守なんでございますけれど、春だも
んですから、つい人出入が多し、客も澤山で煩くつて
不可ません。

師走から又何の彼のつて、氣忙しくつて逆氣まし
てね、大概病人になりましたから、一日ゆつくり。
些と手足を伸ばしませうと思つて、今朝起抜けに、此
方へ参りますつもりにして置きましたのに、出掛け

ようとすると、又二三人、餘所の夫人だの、お嬢様だの、中には御夫婦づれで入らつしやるのなんかあるんですもの、ひとり者の處へは罪ですね。と手巾を口に當てなんぞ。

（やう／＼お晝過ぎになつてから、出て参りましたね、一日だけ、尼になりました氣で、おもいれ休まうと思つたんです。

然ういたしますと、女中どもが、憎いことを申すぢやありませんか。

どうして賑かなことの好きな、私ですなえ、洒落にも、好事にも、一人で別荘へなんか入らして、半日だつて辛抱がなるもんですか。須磨、明石は、本で讀んでこそ風情がありますけれど、ツて女中が云つたと謂ふんだが、そりや何うだか、大方自分のこしらへた、言葉の綾とかいふんだらう。

それでも聞く者にや趣があつて、優しい氣がする、別嬪なか／＼の學者さ、君が云ふ、いづれ蝦茶を穿いたものと、直に分る。――

赤帽は讀めたやうに、讀めないやうに、

「へい、人相に露はれるでございますかな、蝦茶にも、ありや山に千年、寄宿に千年、甲羅の生えた萬年蝦茶でございます。

其の癖、見た處は學校あがりのやうぢやござい
ますまい。私は能く知つて居りますが、豪いお役人
の夫人で居ながら、悪くすると、高等淫賣、商賣人
上りも藝妓ぢやありませんで、女郎上りのやうに、
べたついて、第一、あの裾ツつきを寛うして、蹴出
をふんだんにひらめかす工合なんざ、容易ぢやあり
ませんや。あゝいふのは、何でも袴馴れた處から、
腰を引括る紅いものは、禮服と心得て、惜氣もなく
踏み出すんでございませう。何だつて貴下、婦人の
癖に、帯がなくつて歩行んだから、蝦茶を穿いた圖
は、悪く見ると大道中を禪一ツでお練りも同然、肥
つてこそ見えますけれど、長襦袢一枚といふ姿だ、
無法だらうぢやありませんか。

奴め、其に馴れ切つて居るもんだから、ソレひら
／＼とやるのは平氣でさ、不躰千萬な、私ア考へま
すが、屹と其の千之助様とおつしやるのが、しどけ

ないツてお話しだと承りますから、是非其の風を、
見せられたのに違ひますまいと思ふですがな。」

「なに、其のくらゐで済むものか、磨き込んだ櫛
の卓子を圍んで、差向ひで居ると、椅子へかゝつて
居ながら、下で密と足を踏む、」

「はあ、はあ。」

「婦人の方からだぜ、千之字は、汚れた足袋を脱
いで上つたから素足だらう、又素足でなくつたつて、
こりやヒヤリと應へる。」

「畜生、」といつて赤帽は陶然として酔へる顔の、
頬を膨らして天眼に的なく睨んだ。

旅客は頬杖で下を見ながら、駒下駄の尖を刻んで、

「寒からうと云つて、椅子を引摺つて暖爐の前へ
揃へて、無理に並んで掛けると思ふと、手を出させ
て、翳させながら、貴下のお手の方が小さいか不知、
なんて、見て居る中に、指環の嵌つた、細いが重い

指で、一寸突くな。」

「それだ、それだ旦那。」

「然うかと思ふと又、逆上せる／＼と云つて、目のうちを颯と紅くして、肩を落して横顔で覗込むやうにして、

（女は何為恚うなんぞせうね、貴下の其の冷こいお手を、ぢつと當てゝ下すつたら、どんなに清々するぞせう、厭？ お厭なら、撲つて頂戴、さあ撲つて頂戴な、撲たれると私嬉しいの。）なんのツて云つたさうだ。」

赤帽は厚い唇を割つて、生々しい牙を剥いて、變に笑つて、

「吐かしてけちがる。」

3

「3

「（今度は、さあ暑いから、些と其處等を視めませう、別々に立つちや厭よ、貴下は直に景色に見惚れて、傍に居る私を忘れるでせう、恚うして、御覽なさい。）」

と云ふと、二人で打違ひにかける低い椅子さ。

（私も煙草が喫めましたら、恚うして居て、煙だけ含まして頂きませうのに、飛んだ不粹ですわ、）
なんかね。」

「其の術、其の術！」

「然うかと思ふと、

（でも恚うやつて、何時まで居られる身體でせう、貴下は下駄の緒さへたちましたら、直にお歸りになるんですもの。離れる稽古をして見ませう、）とはらりと立つと寝臺にぐつたり、崩れた風情に腰をかけて、俯向いて、

（あゝ、寂しい、おゝ、心細い、つまらない、歸すのは厭になつてよ、貴下お泊りなさいまし。）
「吐かしてけちかる、厚かましい、」と赤帽は呻つていつた。

「何の爾時の千之字が、厚かましいと思ふものか、
最う、悄げて悄げて悄げて返つて、いくら其の姉の
情で、血の動いてるやうな人間だ。はる／＼来て其
にや逢へず、婦人の今のいひ種ぢやないが、寂しい、
心細い、詰らない處で、牡丹亭の雪で無常を感じて、
鼻緒が切れたので、既に滅亡。氣も魂も腸も凍りつ
いた處へ、優しい、情らしい婦人の、而も誂へたや
うな美人のだね、何の事はない、久しい間の禁酒の
あとへ、一滴、恐しく酔ふ、強い、烈しい、怪しい、
花の露を注込んだやうなものだ。

然も吹曝の雪の中から、襦袢も襟も帯も袖も、色
の濃い、蕊の長い、花片の大きい、香の高いのが名も
知れず爛漫として、天竺の名所に咲いたやうな、硝
子室へ入つたばかりか、暖爐はくわつ／＼と。

奴は最う扉を開かれて茶色の窓掛で包まれた、一
面に黄色いやうな、室へ入つた、のつけから、耳は
鳴る、肉は躍る、血は走る、唇は乾く、足は竦む、
膚は荒る、氣味の悪い汗は垂々流れる、碌すツぽ口
は利けず、饞舌れば前を越される、言質は引たくら

れる、體のいゝ生娘が婚禮の晩の如しだー其で幾
歳だと思召す、姓は深見、名は千之助行年かぞへて
二十七さ。早熟だと小兒のある年だ、馬鹿な奴だ、
だから惚れた女には不叶戀で、指をくはへたあとが
禁酒、禁酒のあとが姉さんお留守で、あとで鼻緒を
踏切つた、それから酒だ、此の後でお茶漬を食べる
とおいしい、お汁粉も悪くないが、婦人は不可い。
凡そ烏鳴が悪かつたり、鼻緒が切れた前兆で、情人
の出来た験がない、内へ歸ると女房が返討か、主人
が自殺ね、母親が病氣か、爺様が頓死だ、然もなけ
りや借金取が居催促。然も新しい穿物ぢやないか、
尤も餘りお高くないのだ。然し可い酒だ、大に飲む、
さあ、君も飲め。」とはずんで手を伸して猪口を衝
と出すと、此の人の談話は、酒が言はするのである
ことを、其の容貌と風采と舉動とを見て悟りつゝ、
猶後談を聞かむことを欲する思切なる赤帽は、途中
で切らすまじとて並々とこそ注いだりけれ。

「そんなだもの、何うして厚かましいなんて、心
で澄して蔑みなんぞ出来るもんか。」

君聞け、其の愚なることの甚しきやだ、甚しきに

到つては何だ。庭から入れようとして、硝子張の扉から先づ半身を出してな、

（さあ／＼、）といひ／＼入つても行かず、立つて覗いて待つた時の、其の婦人の顔がだ、亡なした戀人に肖て居ると思つて、天窓から悚然としたと謂ふぢやないか。

いや、そんな、ちよろツかな料簡だから、嫌はれたに相違ない、又嫌はれるやうだから、女早のした奴だ、尤も紅い雪はためしがあるが、女の降つたといふことは、年代記にも記してない。

まあ、君、聞け、其の氣で聞け。」

「えゝ、聞かんで何うするもんです。」

「それだもの、泊つて行けと云はれたので、まさか泊らうとは思はなかつたさうだけれど、間拔め、眞面目になつて辭退をした、其のいひぐさを聞き給へ。」

（飛んだことを、貴女の御名譽のために、私は直ぐ、お暇をしなければなりません、）さ。」

「 4

四

「尤も此の人はね、両親が世を去つて、東京の山
 の手に、學校へ通ひながら、自炊をして居た時分、
 花が咲いても出嫌ひで、日曜にや朝寐が樂み。大戸
 も雨戸も閉めたまゝ、半日引被つて居ると、郵便が
 來て、配達が戸を叩いても、起きないから、合長屋
 の娘が受取つて、庭口から廻つて、しまりはない縁
 側の戸をあけると一所に、庭の櫻が、はら／＼散
 つて入るといふ、春風の暖さ。ぐつすり寐込んで居
 るのを起して、手紙を渡しながら、若旦那、私も眠
 うございませ、裾の方へお邪魔をさして下さいまし
 な、トくの字形になつて謂つたと思へ。」

「旦那、何のお話してございます、怪しかりませ
 んな、へ／＼／＼。」

「否さ、先づ譬がだよ。うむ、寐たけりや入つて

寐ろ、といふと其の娘が笑つて云ふのにや、一寸、
こんな時は、厭だ、成らん、不可い、とおつしやる
もんですよ。然うしないと、おいやなら、殺して頂
戴か何か、機会がなくなつて入れません、と笑つて出
て行つたので、舌を巻いて、今時の女は、と、驚い
たといふ。何、本人は眞個、眠いから頼むことゝ正
直に取つたんださうだ、些と時世後れな人だな。」

「そんな事は後れた方が結構で。」

「だがね、其の氣だから不可ません、寢臺に腰を
かけて、今夜は泊れ、といふのを、矢張鼻緒の世話
をしてくれようと云ふのと一般、雪は降るし、
尤もそれまでに、豫め、折角當にして、わざ／＼東
京から尋ねて来た、姉が奈良行の留守のため、詰ら
なく、失望して歸るツて事を話したもんだから、心
を察して、しんせつに泊めようと云ふのだと思つた
ので。勿論、姉さんが此方に居りや、最う一晚くら
ゐ逗留する筈の事を、話して了つた後だから、用が
あるの、急ぐのは、言譯になるまいぢやないか。其
處で、

(貴女の名譽のため、) さ、いひ種が厭味だね。

すると別嬪は、身體を投げ出したやうに、上靴の裏を見せて、男の方へ、白い爪先を揃へて反しなから、寢臺に深く手を支いて、長く伸ばした膝の上で、手巾を輪にしたり、はらりと解いたり、

(殿方にこそですわ、何の女に、名譽も身分もありませう。お泊り遊ばして下さいますりや、却つて私の名譽ですわ。まあ、お馴染もないのに厚かましい、それでも氣の利かない旅籠屋だと思つて下されば、随分肯入れて下さつても可いやうに存じます。

お厭でせう、お厭でせう、お厭でせうが、行暮れた旅の空なら、野にも山にもお寐らないとは限らない。唯もう一思ひに然う斷念めて下さいまし、そんなにして在らつしやると、種々、東京の夫人の事やなか、お考へなざるから、言そことを肯いて下さいません。思ひ切つて恚うして、) といふと、上靴を脱いで、其の足を何だ、ふつくりした裾にくるんで、するりと浮して寢臺の下へ活發に横に寝た、上前を引張つても、友染は媚しい。-

「其だ、旦那、」
と赤帽はフト調子高に言つて、拳を握り、腰を曲げて、相撲が仕切つた身構で、激しく足踏をしたのである。

「寝て見せて、」

（さあ、一思ひに恚うやつて此處へ横にお成んなさいまし、私が搔卷を持つて来て、密とおかけ申しませう。然うして目を瞑つて頂戴な、然うすりやもう、斷念がついて泊られますやうになりませう、よ、然うなさいましよ、貴下後生だから、然うなすつて下さいよ、）といつてね、まくれた袖の二の腕の、雪のやうなのを惜氣もなく、小兒のやうに寢臺を打つて、手巾を投げちや釣り寄せる、其の桃色が摩く度《に、得ならぬ薫が馥郁として、霞の梯、渡れ、渡れ！》 どうして猫がチヨツカイで、犧をおもちやにすると思へるものか。

初対面の男にそんな事が、と思ふかも知らんけれど、なか／＼其くらは何でもない、あとで、薄茶を一服といつて、下座敷へ連れて行つてから、火鉢

を中なかに差向さしむかひとなつた時ときにや、じり／＼と摺寄すりよつて
來きて、膝ひざをね、膝ひざへ、

「汽車きしやが出でます、」と野放圖のほうづな大聲おほこゑ、扉ドアから坊主ぼうず
天窓あたまを出だしたのは例れいの豫言者よげんしや。
がらんと鈴ベルが鳴なりはじめた。

5

「
5

五

「お待ちなさいまし、旦那だんな、唯今たゞいま出でますのは急行きふこう
が着ついたのでは無ないでございませ。此この名古屋なごやを十
一時じ三十分ぶんに出でますが、あとが來きませんために是これ
まで見合みあせて居をりましたのを、餘あまり遅おそくなりますに
因よつて、仕立したてゝ出だすでございませ。こりや一々停ステ
車場インヨンへ寄よりますですから、のろくツて仕しやうがあり

ません。」

「然うか。」といつて、少い旅客は、一度立ちかけたのを猶豫つたが、早や此の待合には、荷物も人も其の隻影を留めなかつた。尤も汽車の出發することを知るとゝもに、念のため赤帽は勢よく駈け出して其の急行にあらざることを、確めた上引返して來たのである。

其の間に旅客の醉顔に映じて、待合に在りたる同勢は、最後に入つて來た、彼の名古屋美人を眞先に、學生が續き、士官が續き、商人を前後に、少女を連れた老夫婦を眞中に、暖爐係が間に狭り、瘦せた貴婦人と肥大紳士が其のあとへ、めりやすの股引が殿して、別に二三の赤帽と荷物とが間を縫ひつゝ、臙として一方口から出て去つたが、恰も消え失せたやうな感があつた。

「しかし、不殘乗つた、」と改札口の方を伸上る風情で、旅客は迷へる面色である。

赤帽は根を生して又ツクと立ち、

「お話のあとが承りたいで、お留め申すではないでございます。此の汽車は恚うやつて平時一時間餘り前へ出るですがな、すぐ早や停車場五ツと行かない中に、急行が、ガツと背後から出抜いて乗越すでございます。其の氣の利かん事ツたら、辛抱が出来るわけのものでないですよ。

折角お待ちなすつたものだ。

如何に後れるツたつて、彼是二時半、追つゝヶ原から乗りつけませう。」

未だ決せず、差俯向き、

「是は何時だ、新橋着は、」

「お極りは翌日十二時といふのでございますがな、得て、後れ勝なのが、此の様子ぢや、雑と四時頃にはなりませう。旦那悪い事は言はんでございます、思ひ切つてお待ちなさいまし、えゝ、もう暫時。」

と心から留めて云ふ。

旅客は黙つて、やゝあつて、

「君も、寝轉んで、留める方だな。」

「はゝ、はゝゝはゝゝ。」

「いや、引留められて良い事はないのだが、可からうー。」

「お待ちなさいますかな。」

「其のかはり、もしか、來なかつたら、夜の明けまで附合ふんだぜ。」

「可うがすとも、」

「可いかね。」

「然う極つたら、」と手を伸して扉を引寄せて鎖さうとする。

と云ふ構内から、ぶつと入つたのは一名の驛夫で、此の待合の卓子の上へ、鈴をがちゃんと置くと、此方をじろりと見て、身を開いた赤帽に擦れ違つて、ドンと自分で向うから閉めた、これは寐に行くのかも知れない。

汽車は汽笛も鳴さず、雪の上を幻のやうに、熱田をさして、横に長い、薄い茫乎した火の光が野中に埋れた時分と覺し。

「酒は未だある、眞個に頼んだぜ。やがて無くな

六

「いかに千之助を嘗めてかゝた悪戯だつて、唯鼻緒を立てゝやるなんかで、呼び込んだばかりで、此方が名古屋へ来たわけを話すものでもなし、又先方だつて突然、泊れ、寐ろなんと云ふ數ぢやない、言つた處で誰も眞面目に挨拶をするんぢやないのだが。

其處が今のね、須磨明石の一件です。

はじめ、別嬪の云ふのにや、

(女中が然う申すんでございますよ、須磨や明石は本で読んでこそおもしろうございますが、其の體になつて御覽なさい、どんなに寂しいか、心細いか情ないか知れませんか。別荘へは、多日誰方もおいでなさらず、寮番の爺や一人、お疊もお廊下も石のやうに冷くなつて寂れ切つて居りませう、場末だし、人通はなし、黽の名所なんですもの。爺が又、談でもある人なら可うございますが、五十年前の事を、私が小兒の時分、といつて其の時に、其の祖父から

聞いたこと、あれこれといふ他に、世間話は、因果
經の引き事さへ存じません。そんなものを對手にし
て、貴女の御氣象、何うして御辛抱が出来ませう、
狸が出ますとさ。なんのと申して、人を馬鹿にして
留めませんが、貴客。

女中たちは私に御褒美を驕らして、歌留多や雙六
といふ巧なんでもございますわ。

まあお前たち、お湯へ入るばかりが身體を清める
のぢやありません、たまには一日、浮世も離れて見
なければ、と高慢なことをいつて、斷つてと申した
ものですから、そんならおいでなさいまし、其の
かりには誰もおつき申しません、晩のめし食りもの
も、お重詰で持つて參つて、直に御免を蒙つて了ひ
ますが、貴女お一人、お別荘へ流しものになつて、
尼寺でお寐なさいまし、と口惜坊。

あゝ可いよ、可いとも。寒さに清水が涸れないで
居たら、それで道明寺で凌いで見せるよ、晩の支度
にも及ばない、と争つて參りました。

師走のはじめの煤拂の時に、一寸見まはりました

ばかり、絨氈を敷いてあるべき處へ、筵を擴げて、
爺やが私得に搗かせました、缺餅を乾して並べてご
ざいますやうな寂れ方なんですもの、何の床の間を
見ましても、懸物一幅かゝつて居ず、花一輪咲いて
は居ません、赤いのは爺やの鼻の尖ばかり。

漸ツと思ひ切つて出て來ました、行火の香をさし
て立働くぢやありませんか。

それでも來がけには、大層威勢よく、霜げて寒い
のに、十疊の眞中へ、濕ぽい炭をついだ、火鉢か何
かで、縁側の障子を明けさして、淋しい冬木を視め
ながら、おや／＼何十里來たか不知、此のさきに名
古屋といふ町があるのかと、望み通り、浮世を離れ
た心持になつて、ソレ見たか、内ぢや寂しがら
う、可い氣味だと、風説して居ようが、然うは行か
ないとをかしくつて、氣違ひ染みた、一人で莞爾笑
つたり何かして、澄して居りましたが。

ぢつと鬱ぎ込んで來ましたのが、貴客、宅を出て
參つてから二時とは經ちませんのでございますもの。
まあ、こんな事では今夜どころか晩方までも覺束な

い、何うしたら可からうと、大概苦に病みます内、
ちら／＼白いものが降つて来て、枯樹に花も咲きかゝ
りますから、いくらか紛れて居ましたがね、寒いの
何のぢやございません。

床の間に掛けた飾藁の大なのが、ざあ／＼鳴りま
して、蚤が家の蓑かと思ふと、山奥の瀧にも見えま
す。

掃除は綺麗にすると見えて、其處等に塵一葉ござ
いませんのが、水清ければ、と申すやうで、人の住
んで居るやうぢやないのですわ。神様ぢやなし、佛
様ぢやなし、よく昔から申します、お城だの、大な
邸には不開室といふのがあるんですツて、座敷の眞
中に、お化粧をして、婦人が、客でもなし、人を待
つでもなし、悄乎と坐つて居ます、私の身體が、其
の不開室のお化のやうだと思ひますと、悚然として、
貴客、堪らなくなつて、此の見晴しの二階へ駈け上
つたんでございますよ。と滑らかにすら／＼やる。
尤も話は前後したが、こりや其の西洋室へ、千之助
を入れてから直ぐの事なんだよ。」

と引かけたが。

7

「7

杯を鞆の上、旅客は腰かけに胡坐となつて。

「（まあ、何より先へ、爺に暖爐を焚かせまして、肩からぞく／＼震へるのが留りました、御覽の通り、此の室は、こんなに陽氣なんですから、やう／＼、雪も視められるやうになりましたけれども、寂しいのは同一で、詰らないの何のぢやありません。

然うかといつて餘計な我慢のやうですけれども、今更阿容々々、歸るのは口惜しうございますし、泊るとなると、どうして貴客、思ひ出しても下座敷が悚然とする、おともだちを呼びませうにも、正月だ

と申すのに、誰が尼になるお交際をしてくれます。

又、間違つて、望んで来る者はいくらもありました
處で、氣に合ない人とお話をいたす位なら、はじめ
から今日此の別荘へは参りません。

何うぞ助けると思つて、おゆつくりなすつて下さ
いますし、よ、後生でございます。ツちや、ソレ卓
子の下で爪先を觸る一件だ。

暖爐の傍へ引寄せたり、椅子で背中を附着けたり、
たうとう寝臺の上へだらしない寝やうをした。」

「そんな處を畜生、奴の胸を突通して、彼の生つ
白い皮の下にや、だく／＼どんな風に血が流れるか、
一番。淫婦め、お極をやつて居ら。」と横顔になつ
て頭を尖らした、薄い髭がすつくりと立つて見える
と、肩を聳かして、赤帽はだぶ／＼とした衣兜の中
へ、手を突込んで血相する。

爾時さした杯を、對手の胸のあたりへ出したまゝ、
差控へて、旅客は屹と見たのであつた。

「君！」

「は、」

「無禮な奴だ、君なら殺すか。」

「殺、殺しませいでか。」

「む、まあ、飲め。私なら私も殺す。」

「旦那も。」

「いや、其の場合に臨んで、然も其が我が色を誇つて、男を愚弄して、半日の無聊を慰めた上に、人の迷ふのを以て自分の容色の美しいことを、自分に證據立てる道具にすると論つたら、少くとも生かしちや置かれんと思つたに相違ない、たとひ手は下さんまでもだ。」

千之助だつて、いかに内氣だといつて、意氣地がないといつて、男兒は男兒だ。然うと知つたら、何、あとの辱を受けるやうな間拔けなことをするものか。

けれどもです。」

けれどもですと弱くなり、

「毒とは知らず、香に迷ひ蜜に酔うて、既に其の婦人を以て、自分の戀人に肖て居ると思ふ心から、牡丹亭の雪といひ、鼻緒の切れた小路といひ、不意

に天降つた天女といひ、不思議の縁といひ、故郷から遠く離れた旅といひ、唯酒が飲みたいくらゐに、わざ／＼名古屋まで来たのといひ、姉が留守といひ、前後はまるで夢のやう、今自ら不開室の化粧した幽霊といはれたので、其の下座敷が歴然と目に浮んで悚然とした氣といひ、……あゝ、それほど今も思ふのに、一言心も通じないで、幽冥處を隔つたのは、あまりに果敢ない。其のあまりに果敢いために、此處で夢を見るのであらうと、茫然として、思はず、寝ながら投げた手巾の胸にかゝつた片端を、じりゝと取つて引かれて寄つた。

（あれ、）と一聲。

「え！」

「思ひ出したやうに起直つて、

（まあ、私やどうしたんでせうねえ。）

「それ／＼。」

「喃、君。」

（何うにも恚うにも、寂しくつて、氣が沈んで、消えても行くやうに思ひました處へ、貴客をお連れ申して參つて嬉しいまぎれに、お茶もまだ差上げま

せん。

お泊り下さればお客様、お泊料を安うして、晩のお支度をいたしませう。それには女中が本宅から重詰を持って参りませうが、爺やに申しつけて、お湯もすぐに沸かさせます。御酒はいかゞでござんすえ、ほゝほゝ。)

なんて仇氣なく、そは／＼して。」

8

「8

八

「(まあ、お茶を上げませうにも、あの好きな缺餅を、齒のないどてゝ含みながら、がぶ／＼飲みます、鼻の赤い爺やの、行火へかけちや煮くたらしは、貴客お氣味が悪いでせう。其のかはり内職の草鞋を造る人ですから、お鼻緒は上手に出来ます。もう／＼尼になりまして行のつもりで来たんですから、お煮

花の用意もございませんが、お待ちなさいまし、四疊半には、いつかいたしたまゝの棗がございませう、粗末ですが道具も揃つて居る筈ですから、一服たてゝ差上げませう、行らつしやいな！)

ずツと遠慮のない、十年の知己をあしらふやうに、ものは謂はさないで、すツと扉を開けてさ、さつ／＼と廊下へ出ると、こゝに白く塗つた欄干がある、直ぐに螺旋形の壇階子。下りようとして一寸つかまつて、背を曲げると、むかうへすツきりと顔が映つた、色の白い眉の鮮かな。其の取着に姿見がかゝつて居る。

其處へ、上靴の音を軽く行くと、

(来て下さいな。)

(何です。)

(此處をね、少々開けたいんですが、しばらく見た事がありませんから、何があるか分りません、鼯でも飛び出すと、氣味が悪うございますから、傍に居て下さいな。) ツていふのだ。

姿見すがたみの下したが、けんどんで、小さな謡うたひの本ほんに扇あふぎを打ぶつ違ちがへにつけた、色紙しきしが張交はりまぜになつて居ゐようといふ大變たいへんな和洋折衷わやうせつちゆう。

開あけると、冷つめたい、美うつくしい、戸棚とだなの中なかに、友染縮緬いっせんちりめんの肩當かたあたをした、藍あゐ、紫むらさき、黄きなど五色染しきぞめの絹夜具きぬやく、桃もも色いろの裏うらがすらりと見みえる。

（まあ、いゝこと、雨傘あまがさにも化ばけないで、）といつて、何なんだか開あけるのが大だい事じらしいから、氣きにして覗のぞき込こんで居ゐた千之助せんのおすけの手てを、屈かんで見みて居ゐたのが立たち上ありざまにぢツと握にぎつて、稻妻いなづまのやうに、片かた壓おさを深ふかく、莞爾にっこりしたのが、姿見すがたみに映うつると思おもふと、取とつた手てを引張ひっぱるやうにして、ばら／＼と駈かけ出だして、其その螺旋形らせんけいの梯子段はしこだんを附くっ着ついたなりにトン／＼トン。

明あかるい西洋室せいやうしつから穴藏あなぐらの中なかへ引摺ひきずり込こまれるやうに、千せんはずる／＼と落おちて行ゆくと、早はや薄暗うすくらくなつた疊廊下たゞみらうかへ落おち込こんだ、直すぐ横手よこての襖ふすまを明あけると、十疊室じふま。

向うの縁の障子が一枚開いて、戸外は雪で、こな
／＼に烈しく巴十文字に動いて居るが、何にもない
廣間は、眞中に小さく、桐火桶と浅黄縮緬の媚いた
座蒲團があるばかり、寂として唯疊の青いのが陰に
沈んで、帆の影一ツない大晦日の海見たやうな。

火桶の中に、濕つて佗しかつたと聞いた、其の炭
も起り切つたあとゝ見えて、眞中に、尉になつて居
る。

（しばらく此處で、まあ、お敷きなさいまし、蒲
團を裏返しませうか。）と小首を傾けて、千に敷か
せて、自分も一所。しばらく肩を合せて、凭かゝる
氣味合で、黙つて居たが、其の内に膝を浮して、輕
く乗せると、寒いか、懷手で、うつとりして、

（待つて在らつしやいよ！ 支度をしますから。）
（否、それには、）といふ内に、後姿の、裾捌き、
雪の色ちら／＼と、今入つて来た襖の外へ、くるり
と振向いて、全身で大きく振返つたが、すツとしめる
と、遠くまで跫音がして寂寞となつた。

あとで千之助は、膝を視めてキッチンと坐つて、小な咳をしたが何ういふものか。

雪の降るのを背後にして、床の間を向いて、其座蒲團に乗つて居たが、なるほど瀧だ。恐く大な飾藁だといふぢやないか、當地では。彼するかね。」

「えゝ、よく寺方で行るでございます。門跡の書院なんか大いのをかけるですが、何か、立派だといふので遣つたでございませう。」

「其の癖、千家の流を汲むんださうだ、何でも和洋古今に渡るんだな。」

そりやよしさ、やがて半時ばかり、つくねんと待つて居たが、其の時は然まで心細くもなく、不開室と云つた部屋とは知つたけれども、自ら男のお妖と思ふほどにも無かつたさうだ、本人、人間あつかひは為れないのに。

しばらくすると、内の、おもて玄関と思ふ處に、から／＼と腕車の音さ。」

「其のまゝ出しぬいて本宅へ歸つたですかな。」

9

「9

九

「否、曳込んだの。」

「はて、」

「一時、何となく陽氣が立つて聞えたが、頃刻すると、小刻な跽音がまじつて、廊下を二三人で此方へ近いて来る。坊ちゃん、お駈け遊ばしてはお危うございますよ、といふ女の聲がして、それから一團になつたが、襖をあげると、二十二三の仲働と思はれる、唐縮緬の友染の帯をお定りのお太鼓で、厚化粧、切立の絲織の前垂したのが、薄暗い臺洋燈を持つて来ると、其に續いて、五歳ぐらゐ、洋服の男の兒と、八歳ばかりの被布を着た女の兒が、ちよこ／

と躍るやうな身振で駈け込んで来た。女中はね、
あかりを置いて、一寸會釋して、おいたをなすつて
は不可ませんよ、と捨臺辭で出て行く。

小兒たちは、もの珍しさに、叔父さんの左右へ
寄つて、男の兒が、突然火鉢の上へ肥つた赤い手を
かざしたがね、片手に剥きかけの蜜柑を一個。

こりや敵の首を分捕つたやうに、座敷の中を差上
げて来たものだ。

女の兒も傍へ坐ると、此の方は持つて来た護謨毯
を、かさねた袂へ入れて、火桶へ手を出して一所に
左右から顔を見た。

あゝ、よく肖た女の兒だと思ひながら、千馬鹿め、
まだ別嬪が此の小兒たちの母親だとは氣がつかず、
自分の戀人も姉弟は多かつたなんのと、お話にもな
るんぢやない。

それに入りの多い邸と見えて、人見知もしない處

が、最初は憎くもなかつたさうだが、男の兒が口を利くときよつとした。

（おい、剥いておくれ。）さ。

蜜柑を突つけたから、それでも、

（是をですか。）ツて、火桶の上で、皮を剥いて渡さうとすると、

（厭だい、お獅子にするんだい、お獅子だい。）

分るまい。

（あのね、恚うやつてね、くるりとやるのよ、）と女の兒が高慢に指揮をしたが、薄皮を剥いて引つくりかへせと云ふこつた。

色男畏つてね、指を汁だらけにして、旨く行かない、一片、分切ちぎれたのを拵へると、じろ／＼見て居たつけ、

（爺や、上手だ。不器用だなあ、）と恚うだよ。

癩に障つたが對手は小兒だ。

（どうも旨く行きません。）と出して遣ると、ペ

ろりと吸つて、残つた薄皮を火桶へびよい、チユウ、
残り少々の火が又えて尉が立つ、眉を顰めて手で拂
つて居ると、

(さあ、)と又出した。

片一方で女の兒が、卷莖を見つけたらう。女だけ
に、お世辭のつもりか知らんが迷惑だ。

一本吸ひつけて渡します。

(難有うよ。)と半分ばかり飲んで置くと、あと
から直ぐつけて、

(あい。)と出す。

(さあ。)

蜜柑を剥けた。

(あい。)

煙草を飲めさ。

のべつ幕なし、汁がしみて指がべた／＼する處へ、
煙草の脂が染まるだらう、氣味の悪い事、手巾は下
駄を結へようとして泥だらけになつたのを打棄つた
し、一々半紙を引張り出すも、お細工ものをするや
うだから、汚れた手を袂へ突込んだや、襦袢で拭く

始末。^{しまつ}

(さあ。)

それ蜜柑。^{みかん}

(あい。)

煙草。^{たばこ}

むら／＼として、えゝ、一合ぐツと呻つたらな、^{あふ}

此奴等蹴殺してくれようと思つた。^{おも}

しつきりなしに(さあ、)と(あい。)

其の中に煙が出るのがおもしろくなつたか、男の^{をとこ}
兒まで眞似をして煙草の方へ手を出した、飲まねば^の
強ひる、傍を向けばせがむ、屹と見りや泣きさうに^な
なる、立續けだから堪らない。舌は澁くなる、咽喉^{のど}
はつまる、頭痛はする、ごほん／＼と咳入つて、胸^{むね}
をおさへて、もう／＼煙草と蜜柑は一生たち物だと^{もの}
思つて、眞個だよ、心の内で泣いたさうだ。」「
と旅客は呵々と高く笑つた。^{わら}

十

「可笑からう、君も笑へ、大に笑へ、私も笑ふ、笑つて遣る、壮に其の屈辱の醜態を笑ふんだ。又縁側から覗いて笑つて居たものがあつた。

婦人が何時の間にか向うへ廻つて、其の開けてある障子の外へ、すつくりと立つて居たのだ。

千之助は煙に咽せ入りながら、胸を壓へて、はアノ、いつて、吹通しの方に顔を向けると、其處には、帯は解き捨て、水淺黄の扱帯を寛く、胸なりに裾を引いて、背は一層高いが、先刻よりはすらりとして、其房々とした黒髪が、少しほつれて、頬にかゝつた、小耳の處へ、濡手拭をあてゝ居たが、湯上りと見えて、しつとりと雨を含んだ、花も枝も雫が垂りさう。色はいよゝゝ白く、ほんのり薄紅さへさしたのが、洋燈に映つて、あからさまになつたが、ち

らりと、姿を残したゞけ。

（お寒いでせう。）とばかりで障子を引く。女の

兒が、

（母さま！）といふ中に、はたり。はたりと縁を
行く重たい跽音。

千之助は吃驚した、呀、此の兒の親か、上向の用
をかねて東京へ行つて居る、内の主な人といったの
は亭主。

と八分は酔のさめた處へ、先刻の女中が、今度は
臺所を働いて居たか、それともお背を流した事が、
緋の下じめを急拵への、襷がけで入つて来て、

（さあ、坊ちやま、母様がおいでなさいツて、嬢
様も入らつしやい。）

といふと、女の兒は寒さうに、兩手を袖につゝこ
んで直に立つたが、男の方は、
（うむ。）といふと、喰ひ残した蜜柑の皮を、ぐし
やりと千之助の膝の上。憎體に、

（馬鹿。）

（あれ、何ですな。）といった切、別に取なさう
ともしないで、女中は其まゝ、二人の小兒は廣い座

敷を綾に泳ぐやうにして、一所に悪い潮が退いたわ。
其ツ切、何時まで経つても誰も出て来ない、又來さ
うにもしないで、火は消える、寒さは寒し、ね、火
桶に嚙りつくと、巻苳の吸さしが冷くなつて白骨の
やうだ。

手をたゞく分ぢやなし、

（あの、あの、）と口まで出る、人を呼ぶにも遠さ
うだから、大聲を出すも異なるものなりで、其なりに
引込んで了ふ。第一、口も利けないほどに腹が空い
て了つたさうだ、然うだらう、碌に朝ツから食はな
んだものな。

背中へ附着きさうに空腹な處へ、立續けの煙草に
あたつて、惡寒いから頭痛はする、酸唾は走る、千
之助は九死一生。

八時半頃になると、戸外へ腕車が出たやうすだ、
大方小兒どもが歸つたんだらう。あゝ、然うすると、
何か、手足まとひを拂つて置いて、それから世話を
して呉れる氣か、然う思へば遠くの方で、時々派手

な笑聲、それにや小兒の泣くのも聞えた、なんのと、
それまでは、いくらか心を置いた千之助も、一心に
最う、其の婦人が便になつて、あはれぢやないか、
他人の女房と知りつゝも戀しくなつて、顔を見るの
を待兼た。

寂しさは、前にも増して、鼠の走る音もしない、
時々あツといふ戸外の音は、積つた上へ眞白な布、
くる／＼巻きながら降るのであらう。

何といふ身の上です。

其處等を歩行くのも廊下鳶とかいふものらしい。
女中は大方、先刻の話の張合で、唯重詰ものでも届
けに來たのを、いくらか手傳はさしたらうが、泣く
兒に附けて歸したあとは、煮るにも炊くにも主婦の
手一つ。

馴れない事を恐入る、まさか、汐干の屋形ぢやな
し、此處で重詰ものを開くでもないと、氣扱ひをす
るのであらう。酒の爛でもして居るか、いや、然し

それは折角だが飲めません、と生欠伸をしたのなんざ、大藏流、鷺流にありさうな、此の男の腹は後學のために、土用干をしたいくらいだ、尤もから乾に干せちや居たが、」

「まあ、何たることでございますなあ。」

1
1

「1
1

十一

「やがて又小一時間も経つたと思ふと、やう／＼登音が聞えて来たから、

膳か 椀か、あの裾を曳いて媚しいのがと、うつむいて居た顔を上げると、大違ひ。

めりやすの膝小僧を出して、鼻の赤いの。ねえ

君。
」

「それ／＼。」

「吝な大屋が、夜中に路地を開けるやうな、身構へで、

（遅くなりましねえか、お前様、何時の汽車だ、間に合ふかね。）といった。」

「其だ、旦那。」

「千之助は唯赫としたが、問答に及ばずよ。」

（あゝ、時間だ、失敬。）と一直線に突立つたさうだが、ふら／＼して疊に躓いて、うろ／＼廻る。

爺やが落着いて、

（矢張、はあ、入った處から出さつせえ、此處だよ。）と先へ立つ。

最う憤る元氣もない、唯恐しくなつて、疊が一町、とあとについて、座敷を出ると、梯子段。

井戸から覗くやうに上へ折曲つて灯影が射す、夢中で上り切ると、消えてもなくなつたかと思つた自分の體は、姿見に映つた。顔が蒼い。

扉は開けてあつた西洋室、ぽつと燃えるやうな暖さ。

テーブルの上へ、金光燦爛として、解放した繡珍の丸帯、一所に紐やら、帯留やら、裾やら、振やら八口やら、なえしをれた花束のやうに衣類を丸げて脱ぎ棄てた、寝臺に、其の五色染の掻巻をかけて、ぶつくり沈んで、長襦袢の肩微に圓く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸と寝ながら、うしろから洋燈を受けて、寶玉入の指環の手に、一寸押へ、軽く斜にかざして、横文字の書を見て居た、枕頭の黒檀の置棚に、高脚の洋杯が一個、ベルモットの瓶が並べてある。

言語道斷、ものもいはず、又いはせさうにもない風だつた。

千之助は此の状に又赫と込上げた、ニコチンの毒を吐きさうになつた胸を壓へて、通り抜けると、入口の戸の處。

すぐに庭だから、開けるトタンに閉めようとする

構で、爺が引手に手をかけて待つて居た。

(豪い雪ぢや、)

といふ、芝生を見ると、眞白な中に下駄がね、鼻緒の切れたなりで揃へてある。

飛び下りて引摺むと、バツと一時に吹きつける、部屋へもばらりと散り込んだわ。

(ほい、)と閉める。

窓あかりに、口八臺に置いて入つた、鞆が舊の通あるのを見て、

(あゝ、姉が名古屋に居たらば、)とはら／＼と熱い涙。まともに面も向けられない、雪だらけの鞆を取るや否や、跣足でころげ落ちるやうに、微塵になれ、と身體を枝折戸の外へ投げ出した。

南も北も雪の横町、上も下も眞白な中に、一足踏み留ると一所に、恥をさらへて来た、下駄を、一ツは前津の田圃の方へ、一ツは記念碑の大通の空へ、叩きつけ、投げ飛ばした、此の椋鳥は、吹雪の中を、

何里さきへ翔けたらう。

赤帽君。
「

と呼吸をつき、

「で、私は思ふんだ、よくまあ、無事で千之助が、私の居た旅籠まで駈けつけて、無事に生命があつたらうと。

何事も思はない、唯何為憚ういふ時、風に乗つて、姉が奈良から歸つて来てくれないのだらう、と其はつかり思つたつてな、可哀さうぢやないか。

逆も、此のまゝでは歸られないと云つて、人心地がついてから、紫川へ行つたつて。私も強ひて留めなかつた。唯聞いたゞけでさへ、少時も早く、名古屋の土地をはなれようと、私は自分で思つたがな。汽車のおくれたのは幸だ、逆も此の話を、黙つて胸に持つて、東京へは歸られない。」

旅客は頭をふら／＼と、鳩尾を撫で／＼、

「あゝ、是で少し胸が空いた、よく聞いてくれた、赤帽君、謝す、大に謝す、しかし君にや氣の毒だつた。」と眞面目に云ふのも酒なのである。

1
2

「1
2

十二

赤帽は聞く中にも、酔つたか、何となくそは／＼して、立ちながら足許も定まらぬやうだつたが、彼の黄なる目をぎよろつかせて、頻に四邊を見廻したと思ふと、

「旦那………」

旅客は語り果て、恍惚としたのであつた。

膝を屈めて、

「旦那、旦那。」

「あゝ？」

「ぢや、何でございますかな、お綾の阿魔は、」

「おあや、」

「えゝ、綾てえあまつ女、綾子とけちがる。獸で

え、畜生。ぢや、其の今夜は、廣見の別荘に寐まし

たかな。」

「寐た・さうだ。何、寂しいの心細いのつ

て、千之助にいつたのは皆術さ。何しろ、長襦袢一

一ツで西洋酒を枕頭だから、雪の降るのも花盛り、

一夜雲に寐るつもりだらう。」

「で、一人で。」

「然うだ、爺と二人だ。」

「むゝ。……」

と下腹に響いた、呻くやうな獨言。

「此の雪だしよ・旦那、そんな奴は何うす

りや可いんでございませう。」

「此方が間拔さ。」

「いんえ、其、其の千之助様に限らずだね、豪い人でも、學者でも、先生でも、色じかけでたらし込みやがつて、世の中に佳い婦人ほど立派なものはない、我を見る、とのべつに來やがったら、唯は置けますまい。」

「・・・・・・・・」

「何うすりや、可いんだね。」

「まづ殺すんだ。」

「可うございますかな、殺しても。」と膝を振つて、地踏鞆を踏んで、赤帽は握拳を上げたり下げたり。これは酔つた目に見えなかつた。

「可いとも。」

「はあ。」

と氣を詰めた、呼吸を引いて仰むげまに又壁に凭れたが、腕を拱き、目を瞑つて、熱い息をふツと吹いた。

天窓にくら／＼と響いて、重い、沈んだ、小な地震のやうな深夜の物音。

赤帽は潤と目を開け、片手を、衣兜の廣い、上衣の下へ、肱を曲げて突込んだが、つか／＼と出て、扉を押した。

「汽車が来ました、旦那。」と聲をかけ、然も勞れた體で、椅子の手についた肱の上へ、横顔をつけた旅客の姿を、ぞつと見て、狼のやうな腰つき、前屈みになつてづつと出た。

「おゝ、着いたか。」

仰いで時計を見れば、三時四十分。しばらくそれを視めたなりに、旅客は外套の袖を合せたばかり、動かないで居た。

赤帽が来るのを待つたのである。荷物は軽い、乗込の世話を頼んだのであるから。一分二分、瞬間に早や三分、やがて、五分にならうとして沙汰がない。

心許なく、衝と立つたが、鞆を提げ、杯も、鑊も、

其まゝ、急に待合を出たけれども、何となく物足らず、四邊をニすと天井高く、壁白く、プラット・フォームのきらびやかな、しかし寂しい、電燈の影に、關ヶ原の雪に埋れしとなむ、偉大なる鐵の蒸氣機關の、たら／＼と汗を帯びて、黒く艶かに堆く突立つあるのみ。

夜目には其の邊の人の影も届かず、況して構内には、跫然として高く、纒に跫音の響くばかり、立停まれば其も留んで、赤帽の赤い氣勢もなかつた。

「はてな。」
物打案ずる場合にあらず、軽いが提げた、手荷物、引立てるやうにして、思ひ切つて、五六歩進むを、改札口。

「おゝ、酷い。」
といふ婀娜な聲して、構外の吹雪の中、一旦停車場前の廣場に出たのが、吹き戻されて飛び返つた、カラ／＼／＼と駒下駄の音高く、たゞきを、迂るやうに後じさり、少い旅客と背中合せ。

「13

十三

唯と見みると古こ代だい紫むらさきの頭づきん巾を深ふかく、紫し紺こん縮ちり緬めんの肩かた掛かけを
 無む造ざう作さくに引ひかつけて、鐵てつ御お納なん戸ど無む地ぢのお召めし縮ちり緬めんの薄うす手て
 なコオト、絹きぬ手て袋ぶくろの紺こん淡あはく、細ほりそと指ゆの長ながいのが、
 手て提さげの旅り行よ鞆かうに、繡しゅう珍ちんの信しん玄げん袋ぶくろをもち添そへた、丈たけだち
 すらりと、然さればこそ風かぜには堪たへじ柳やなぎ腰こし、梅うめの薰かをりを
 膚はだに籠こめて、艶えんに品ひん好よき婦ふ人じんである。

見み返かへると、振ふ向むいて、

「あれ！」

「呀や！」

「千せん之の助すけさん、」

「姉あねさん、」

「千之助さん。」

「姉さんか。」

と思はずたじ／＼と後に退つた。

夫人はぢつと立つて瞻りたるのみ。

「まあ、よく来てねえ。」といった聲、面をか
くして曇つたが、忙しげに、結ひ目を解く肱寒く、か
つ散る袖の寒紅梅、もどかしさうになぐつて頭巾
を取つた顔は、星の目、眉の月の影、緑の黒髪はら
／＼と、亂れ银杏のおくれ毛にも、一筋の曇を帯び
ず、極めて晴やかなものであつた。

旅客の傍へずつと寄つて、

「御無事？」

と頷くやうにして聞いて、然も嬉しさうに莞爾す
る。

此方は酔ひたる顔を背けて、――
言出でず。

夫人は早く心を汲んだ、廣く且つ遠く離れて居ても、深き思はしつくりと、互に心に相合して、此の構内にしゞまりつゝ、

「お絹さんも亡くなつて、……」

とばかり涙ぐんでいつたのである。

「姉さん。」

「さあ、行きませう。」

「否、私は此の汽車で歸るんです。」

「歸るんです。」

「昨日お宅へ参つたんですが、折悪く、お留守だった。姉さん、手紙で悉しく、失禮、汽車が出ますから。唯ね、酒を、酒を飲まして下さいよ。」

と名残惜しさうに、懐しさうに、うら悲しげな顔をして、早や立別るゝ二足三足、追ひ継つたと見るといきなり、千之助の肩に手をかけた、思が籠つて、手が發奮んで、緊乎頸を搔抱き、

「歸さない、歸さない、歸さない、歸さない。」

「ですが、」

「否、歸さしません！ さあ、早く行つてお酒を飲ませう、私も飲んでよ。」

行かうとする、留めるので、二ツ三ツ、改札口に近く、跫音を交へた。途端に、轟と鳴つて、咫尺を辨ぜざる雪の中を偉人の發程、早く既に遠參尾の山野を壓して、行方遙に、汽車はずる／＼と出たのである。

「大變な雪ね。」

「ぢや、何ですか、關ヶ原で。」

「はあ、埋つたの。生れてからはじめてだわ。ですからさ、九時に着くのに乗後れて、明日の一番と思つただけけれど、何だか歸りたくなつたのよ、蟲が知らせたのね、行きませう。愚圖々々して居ると凍死んぢまふの。」

とつか／＼と蓮歩を運び、威勢よく微笑みながら、

「雪に埋つたり何かして、氣の利かない汽車ツたらありやしない、漸々、出られたのも、私の思だわ、眞個よ。」

「大分、悪くおつしやいますな、夫人。」

「おや。」

「唯今お歸りですか。」
と横合から出て、構の眞中に来て立停つたのは、
當驛長の何某氏、頬の豊かな、眉の凜々しい、鼻の高
い、口髯の美しい、年配四十五六の紳士である。

續いて、どか／＼と其の左右に八九名、皆一様の
扮装して、肅然として立並んだ、いづれも局内の係
員、最後の列車を送り果て、各がじ、恚くて家
路に就かうとするので。

瓦斯を三ツ四ツ提げたのが立交つて、灯はどれと
もなく、五ツ六ツ消えて暗くなつた。

14

「14

十四

「ほ／＼、立聽をなすつたのね。」

「はゝはゝ、いや、串戯は止して、これからお歸宅にならうといふのですか、志那忠でもお起しなさい、酷い雪です。腕車なんざ思ひも寄らずですよ、迎も御婦人に、歩行かれるもんぢやない。」

「だつて、自分の内を見て、旅籠屋は厭ですもの、何ともありませんよ。」

「勿論。お連がある。」

「失禮、あの、赤帽は居ないんですか。」と目を留められたのを機に、千之助は尋ねて見た、少なからず心に懸るのである。

ト、驛夫の中の一人が、
「貴客、赤帽は最う疾うに居りません。唯今此の汽車で、此處へお下りなすつたのは、夫人、貴女お一人でした。」

「はあ、唯一人。出口から構はず吹雪の中へ飛込みますとね、渦になつて捲くんですの、くる／＼まはりながらあとじさりに駆け込んだ時は、呼吸が塞

がつて、死にさうよ。今度は大丈夫。」「といったが、千之助のと自分の荷物。

「驛長さん、預けて行きますよ、千之助さんも然うなさい。そんなものを持つちや歩行けやしないから、何うぞね。」「

驛長は快諾して、

「宜しい。おい、宿直の處へ持つて行つて預かつてお上げ。」「

「憚様、恐入りますね。」「大層お身軽になりましたな。」「御免なさいよ。」「

とて褌引上げ、頭巾をかぶると、駒下駄を脱いで、襦袢の裾の紅深く、身軽う、たゞきへ足袋跣足。

「否、私が、」と自分で、腰かけの下へ突込んで、
「それでは、誰方も。」「

「氣をつけていらつしやい。」「
「千之助さん、参りませう。」「

並んで立向ふ名古屋の市は、打見にも、厚くも狭

くもなつて居た、あまりの雪に、灯の影も見えず、
二人の肩は最う罪。

「大丈夫ですか、夫人。」 驛長が聲をかける。

「否、雪さへ降れば、寄宿舎の庭でよくやつた

の。」

「然し唯今のは、道行のやうですな。」

「油繪の書割ねえ。」

嫣然、千之助の手を取つて、衝と躍り込むと、浴
びせたやうに、一刷颯と吹いて、二人の姿は、眞白
になつて隠れたのである。

「確りなさい、確りして下さい、姉さん。」

「あ……… あい。」

「痛むんですか、酷く痛むんですか。」

「そんなぢやありません。」

といふ聲も息の下、夫人は千之助の外套の袖の下
に、小やかに雪に埋れて居る。

「困りましたな、困つたな、差込むんですか、苦

しいんですか。」と一心に背中をさすつて、
も、吹雪に面を向くべからず、折から頼む樹陰もな
く、身を圍ふべき廂もない、二人はトある侍町の生
垣の根を便つたが、それさへ冷い眞綿の關、袖が觸
れても氷が崩れる。

「冷えたんだ、恐しく寒いもの。私は是でも、酒
があるから未だ凌げる、汽車の中で冷くなつた處へ、
雪路を跣足は無謀だつた、確りなさいよ、弱つたな、
姉さん、姉さん。」

男の衣服の裾に縋つて、しばらく口も利かなかつ
たが。

「千之助さん、打棄つて置いて行らつしやい、貴
下だつて煩ふもの。」

「串戯ぢやありません、是からお宅へ行つて、人
を呼んで来るまでにや、貴女の身體は凍つて了ふ。

おんぶをすりや反るんだもの。驚いた、え、酷い、
亂暴な降だ。」

「私や、私や、あんまりだから、千之助さん。」

「え。」

「笑はうと思ふけれど、苦しくつて笑へないの。」
「眞個に泣くより笑ですね。」

強ひて慰めるやうに情ない調子で言つたが、吃驚して留めた、慌しさ。

15

「15

十五

「あゝ、そんなものを喰べちや不可い。」

夫人は苦痛に堪へやらず、左手を男に縋りながら、雪を片手に掴んで震へる。

「水一口ないのかな！」

と殆ど絶望の聲を上げた時、風がなぐれて吹きまはした、粉雪の底に、唯見ると高い窓灯、庭も屋根も、心覚えの、是ぞ恰も鼻緒を切つた折戸なのであ

る。

膽を貫かれた心地して、胸を衝く千萬無量、思を
繞らすに違あらず。

「姉さん、別荘に灯が見えます、必死の勇でお起
ちなさい。」

と両手を取つて引起すと、灯の力と、男の腕、腕
を小脇に搔込んで、引抱へるやうにして、飛びつく
と、塞がったのは積つた所為で、枝折戸は開いて居
た。

千之助も、もう跣足。

一人か、二人か我さら知らず、夢中で重い體を築山
の上へ上げて、硝子扉に打附かり、聲もかけず、突
然引手を捻ると八々と開く、救の鍵は手にあつた。

袖を拂ふ隙も惜しや、其まゝ絨氈の上へよろけ込
むと、裾、袂を、ばら／＼と落つる雪の、亂るゝや、
散るや否や、颯と紅に染まつたのは、敷物の色の映
るのではない、床に流れた血汐である。

夫人はやう／＼、閉ぢられたやうな目を開けたが、
頭巾をもちてはらりと溢るゝ、もつれ毛の露の隙か
ら、室内を一目見て、

「おゝ、綾子さん。」といった。

寢臺の上。

今の面のほてるばかり、暖き暖爐に、ふくらかな
乳房仄に、引結へる水淺黄、搔卷の襟を漏れて、い
ぎたなき長襦袢の胸、柔かに白く仰向いて、裾に片
膝を立てたる寢姿。枕に鬢の亂れをかけて、がつく
りと横に垂れた、湯上りの寝白粉、まだ其の色も褪
めやらぬに、雪の顔蒼然として、咽喉にがばと鮮紅、
血は長く其處から垂れて、床に花片を重ねたのであ
つた。

夫人は健康を復したが、
「苦」といふと椅子に僵れた。

千之助も飛退つて、扉をドンと背につける。

揺ぐわ、揺ぐわ、傍の窓掛、凸に片目を出して、

ぎろりと様子を伺ふ者あり。赤帽がぬツと出た。

渠は酔へる時よりは、なほ面赤く、茶褐色の薄髻の中に微笑を浮べて、

「旦那、殺りましたぜ、旦那。はゝはゝ、此の通りだ。」

といつて、綾子が玉を伸べた項の中央、疵口を、赤帽は手に取つて、明晃たる鋭き小刀の背で叩いた。

夫人は、ツと面を蔽うた、袂も振も戦いだのである。

「一突にやつたでがすがな、未だなか／＼汽車は出まい、首を持つて行つて、一番お目にかけてようと思つて。」
と血みどれの手を、ずばと、冷艶比類なき犠牲の、心ばかり瘦せた顛にかけると、髪がゆらぎ、飾櫛がカチリと落ちる。

千之助は足が浮いた。

「ト當てがつて置いて、ちよき／＼やりはじめた處へ、不意に飛込んでおいでなすつたで、かくれたですがな、能く来て來さつたい、私はね、紫川なんのとおつしやつたけれど、旦那が千之助様だことは知つたですよ。可い心持でせうね、私もせい／＼した、は／＼／＼は／＼。」

と哄然として又一笑した。此の時の渠の風采は、緋なる其の帽、雪夜の天を蔽ひ、兩眼に凶星あり、足に氷海を踏み、手に尖刀を提げた、一個巨なる悪魔の如き堂々たるものであつた。

是には唯目禮して、千之助は夫人の前。

「姉さん、どうしませう。仔、仔細あつて、私が殺したも同然なんです。」
「え／＼、」と驚いて顔を上げた、夫人の臉は、死骸よりも一層蒼白なものであつた。

「あの、私が死にませうか。」と千之助は屹といふ。

赤帽あかぼうは小刀ナイフを植うゑたやうに、寢臺ねだいに兩手りやうてをかけて、
大おほきく乗出のりだし、平然へいぜんとして、

「貴郎方あなたがた、心配しんぱいはありませんで、何なにね、旦那だんなを喜よろこ
ばせようと思おもつたのは、八ヶ次手ついでだ。

此この婦人をんなは、私わしが兄貴あにきの敵かたきですよ。

こりやね、前せんに兄貴あにきの媽か々々だつたでさ。兄貴あにきは、
商人あきんどの癖くせに、本人望ほんにんのぞみといふで、此この阿魔あまひさ久ひだしい間あひだ、
東京とうきやうへやつて、豪えらい學者がくしやに仕立したてたですよ、馬鹿野ばかやら
郎う、蝦茶えびちやを緋ひの袴はかまほどに難有ありがたがつたで、自分じぶんで一つ
學校がくかうを立てるなんのといふ口くちに乗のつて、恐おそろしく金子かね
を注つぎ込こんだもんでがす。何なに、皆浮氣みんなうはきに使つかつたのは
私わしが知しつてまさ、其そのね、私わしさへ、一寸口説ちよつとくどいたく
らゐな奴やつだ。

現げん在ざい弟あとうしに不義ふぎをしかける、そんなものに、何なんの未み
練れんを、私わしが證據しやうこだ、打棄うつちやれ、と言いつたけれど、へな
ちよこめ、其癖そのくせ紫川むらさきがはや長者町ちやうじやまちには、向むかうから落おッこ
ちる奴やつもあつたですが、因果いんぐわだね。

たうとう何なんです、今いまの亭主ていしゆにおもて向むき寢返ねがへりを

打たれると、其の時分貸して置いた、此の別荘まで公事沙汰に負けて取られてゝさ、何しろ、りうとしたお役人だ、家も落目になつたんで。

地體此の西洋室なんぞも、ハイカラ阿魔の御機嫌とりに、兄貴が拵へたもんだからね、海も山もくれてやれと、さつぱりすりや可しだけれど、意氣地なしだからね、そんな、こんなで、氣が違つて、お去らばだ。

兩親も達者だつたが、其を苦にして死にました。

私ア自分が嫌はれたつて、密通をされたつて、出刃を掉るやうな吝なんぢやありません。婦人は口説くもの、金は湧くものと思つてるんだけれど、兄貴の敵だ。畜生、あのエービーシーと唇を反らす頤骨を引つこ抜いて、妻楊枝にしてくれようと、いつも心がけて居たですがな。

不可ません。餘りだらしが無いから私ア癩に障つて、一番兄貴のどてツ腹を抉つて、血を入れてくれ

ようと、無暗むやみに有金ありがねをつかみ出して、勘當かんだうをされる
と強請ねたりに行つた。

はゝはゝ、おふくろにや出刃でばを向むける、おやぢに
や短銃ピストルをさしつける、兄貴あにきにやナイフをひらめかす、
土藏どざうの下したへ地雷火ぢらいくわをしかけて、線香花火せんかうはなびに火ひをつけ
たのを持もつて、十間けんまぐち々口、一杯ぱいに立たちはだかつて、ゆ
すつたですな。

鹽屋しほやの二番にばんは氣きが違ちがつた、氣きが違ちがつたと皆風説みんなうはきを
したでがせう。

兄貴あにきも氣きが違ちがつて死しんだんだ、系統すぢを引ひくと謂いひ
ますから、私わつしが今女いまをんなを殺ころすと、誰だれも本氣ほんきの沙汰さたにや
しません。

氣違きちがひも色情狂いろちがひだ、下くださりませんや。

折をりがあつたらと、心こころがけてね、衣兜かくしにや平時いっつもナイ
フは呑のんでゐましたけれど、手ては出ださないで居ゐた
ですが、旦那だんなでさへ、殺ころしたいとおつしやつたわ。

堪忍は身分のある人がするこつた。

私はね、旦那を學者だと見たですよ、先生だと睨んだね、學者の先生でさへ殺したい、殺したいが殺さないのは、自分を思ふからだとなつた日にや、してこいなだ。氣違ぢやありませんや、おまけに、別荘へ寝やがつて、この雪は、開いた口へ、眞白な牡丹餅です。

はゝはゝ、一口にやつゝけました、はゝはゝ。と大口を開いて笑ふ。

「姉さん、此の人が氣が違つたんぢやない、私氣が違つたんです、飛んだ事を云つたんです。」

「旦那、御心配をなさいますな、私はね、こればかりも。」
と爪尖を出して見せた、一時間の前は蒲鉾をつまんで、舌鼓をして嘗めた手の。

「其の、命が惜くとした仕事ぢやありません、立派に願つて出てお處刑を受けますよ、これで先づ、

久しく不孝をした、兄貴や両親に逢つてあやまりま
さ、死んだら眞人間になりませう。

絲瓜でもないがね、すぢを引いた氣違ひだと講は
れるのは業肚だで、それだけは含んで下さい、それ
も、何、おもて向きに云つて下さるとお名前が出る、
世の中は盲千人、學者の旦那が、蔭で承知をしてお
くんなさりや萬人力だ、心がかかりはありません。

夫人！

「は……い。」

「お見受け申した處が、千之助様のおつしやつた、
お姉様のやうでございますな。御両親はなし、思つ
た方はお亡なさる、千之助様は最惜い方だ。優し
い旦那だ、貴下、可愛がつて世話をしてお上げなさ
い、恚う云つちや失禮だが、はじめてお見上げ申し
てから、何だかなくなつた兄貴のやうでなりません、
唯兄貴は商人の世間見ずの坊ち野郎だ。旦那は學者
の先生だが、人情は一ツでさ、私は亂暴をしました
がね、これでなか／＼兄思ひなんですよ、夫人、よ
く見てお上げなさいまし。」

「はい……はい。」といったがあどけない娘のやうに頷いた。

「酒も澤山は毒ですぜ。」といひ澁つて、赤帽は屹然と立つて目をしばたゝいた。

夫人は聲を忍んで泣いた、千之助も落涙した。

更めて、

「姉さん。」

「あゝ。」とやう／＼涙の顔。

「どうも此の人は殺されません、私が、代りに死ぬと云つても、姉さんも殺すまい、君も肯くまい。

其處でだね、姉さん、凡そ貴女の名望と、憚りだけれど、其の御容色で、非常の場合です、此の名古屋で、凡そ、此の土地に於て、枢要の地位にある人の幾人が欺けます、否、欺くんぢやない、歎願する、歎願して、言に従はされるでせう。」

「命乞ひ？」

「然うです、旅行券をごまかして外國へ遁がすん

です。」

「然うね。」

とはツちり清しい目ざし、早や映る、綾子の死繪に慄然としながら、

「千之助さん。」

「え。」

「手を。」

指をおさへて、一人・二人・三人・四人・五人と算ふると互に頷き、目を見合せて、吻と息。此の物語に秘すべきは、夫人が實の姉ではなく、姉妹のやうだつた、千之助の戀入絹子が信友であることではない、夫人二人の良人の名と、及び其の地位とである。

【完】